

座席番号			
------	--	--	--

E I M E I オリジナル 北辰テスト 予想問題

第 3 学年 第 3 回

国 語

(5 0 分間) 満点 100 点

注 意

- 1 問題は全部で大問が 4 問あり、表紙を除いて縦書きです。
- 2 答えはすべて解答用紙のきめられたところに書きなさい。
- 3 文章中にある※のついた語句は、文章のあとに（注）があります。
- 4 文字はくずさず、濃くはっきりと書きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

西日が差し込む美術室は、絵の具と溶剤の混ざり合った独特の匂いに満ちていた。

中学最後の夏。コンクールへの出品を控えた美術部員たちは、それぞれがキャンバスに向かい、沈黙の中で筆を動かしている。

拓海は、イーゼルの前に立ち尽くしていた。

「……やっぱ、何かが足りない」

小さく呟いた言葉は、隣のイーゼルから聞こえる、小気味よい筆の音にかき消された。

隣で描いているのは、同級生の美咲だ。彼女のキャンバスには、青や黄色、赤が嵐のように激しくうねる、抽象的な風景が描かれている。迷いのない筆遣い、あふれんばかりの色彩。その絵からは、見る者を圧倒するような熱量が放たれていた。

それに引き換え、自分の絵はどうだろう。

拓海が描いているのは、通学路にある古い赤レンガの倉庫だ。遠近法も正確で、陰影のつけ方も教科書通り。デッサンとしては申し分ないはずだった。しかし、全体を眺めると、どうにも退屈で生気がない。まるで、誰かが用意した見本を丁寧になぞっただけのようだ。

拓海は、絵の具の乾きかけたパレットを見つめ、①思わず深くため息をついた。

「またため息？　これで今日、三回目だよ、拓海」

美咲が筆を休め、こちらを覗き込んできた。彼女の額には、うっすらと汗が浮かんでいる。

「あ、いや。ごめん、邪魔したな」

「気にしてないよ。それより、また行き詰まってるんでしょ。どれどれ」

美咲は拓海の絵の前に回ると、腕を組んでじつと見つめた。そのまっすぐな視線が、拓海には少し※気恥ずかしかった。

「うーん、相変わらず丁寧だね。空のグラデーションとか、すごくきれい」

「……褒められてる気がしないよ」

拓海は※自嘲気味に言った。

「いや、本当に褒めてるんだけど。でも、確かに何て言うか……お行儀が良すぎるのかな」

「お行儀が良い、か。まさにその通りだよ」

拓海は肩を落とした。

「失敗するのが怖くて、つい無難な色ばかり選んじゃうんだ。美咲の絵みたいに、見る人の心を揺さぶるような強さがない。自分の絵には、自分だけの『何か』が足りない気がしてさ」

美咲はしばらく黙って拓海の絵を見ていたが、やがて、窓の外を指差した。

「ねえ、あれ見て」

促されて外を見ると、ちょうど西の空に太陽が沈みかけていた。厚い雨雲の切れ間から、②燃え盛るようなオレンジ色の光が、一筋、地上に向かって突き刺すように差し込んでいる。

「きれいだな」と拓海が言うと、美咲はいたずらっぽく笑った。

「そうだけど、それだけ？ あの光、雲を押し破って、すごく強引に光ってるじゃない。お行儀なんてちつとも良くない。でも、だからこそ、私たちの目を引きつけるんだと思う」

美咲は再び拓海の絵に視線を戻した。

「拓海の絵はさ、すごく優しいんだよ。隅々まで気配りが行き届いていて、冷たい影の中にも、静かな光がちゃんと描かれている。それは拓海にしか描けないもの。ただ、今は『きれいにまとめよう』としすぎて、その優しい光が閉じ込められちゃってる気がする」

「閉じ込められてる……」

「そう。もつと、自分の見たい光を、わがままに表現していいんじゃない？ 誰の評価も気にしないでさ。③このレンガに、どんな光を当てたい？」

美咲の言葉が、拓海の胸に静かに染み込んでいく。

自分は、先生やコンクールの審査員が「良い」と言うような、正解の絵を描こうとしていたのではないか。失敗を恐れるあまり、自分の内側にある感情や、表現したいという初期の衝動に、蓋をしてしまっていた。

「僕が見たい光……」

拓海はもう一度、窓の外の夕日を見た。雲を切り裂く、強烈なオレンジ色の光。あの光が、もし古い赤レンガの壁に当たったら、どんなに美しいだろう。その瞬間、拓海の脳裏に、赤とオレンジが激しく混ざり合い、レンガの表面を黄金色に染め上げる情景が鮮やかに浮かび上がった。

「……美咲、ありがとう。僕、少し分かった気がする」

「お、④復活したみたいだね。期待してるよ」

美咲は嬉しそうに微笑むと、再び自分のキャンバスに向き直り、勢いよく筆を走らせ始めた。

拓海はパレットを手を取った。これまで使っていなかった、鮮やかな朱色と黄色を多めに絞り出す。筆にたっぷりと絵の具を含ませ、キャンバスの前に立つ。

手が少し震えた。せつかくきれいに描いたレンガのデッサンを、この強い色で塗りつぶしてしまうかもしれない。しかし、不思議と怖さはなかった。拓海は息を深く吸い込み、⑤思い切りよく筆を動かした。

キャンバスの上に、夕日のような鮮烈な光が、一筋、走り抜けた。

書き下ろし

(注)

※気恥ずかしかった……てれくさく、きまりが悪い様子。

※自嘲……自分で自分をあざけること。

問「傍線部①「思わず深くため息をついた」とあるが、このときの拓海的心情として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 美咲の絵の迫力に圧倒され、自分には絵の才能が全くと感じて半分あきらめかけている。

イ 自分の絵が技術的には正確であるものの、どこかつまらなく個性に欠けることに悩み、行き詰まっている。

ウ 美咲が自分の絵を覗き込んできたことで、自分の未熟な部分を指摘されるのではないかと不安になっている。

エ コンクリートの締め切りが迫っているにもかかわらず、全く絵が完成しないことへの焦りを感じている。

問「傍線部②「燃え盛るようなオレンジ色の光が、一筋、地上に向かって突き刺すように差し込んでいる」とあるが、美咲が拓海にこの光を見せたのは、拓海にどうあつてほしいと考えたからか。その理由を、「光」という言葉を使い、三十字以上三十五字以内で書きなさい(句読点も一字に数えます)。

(7点)

問㉓ 傍線部③「このレンガに、どんな光を当てたい？」という美咲の問いかけに対して、拓海の脳裏に浮かび上がった情景はどのようなものか。本文中の言葉を使って、十五字以上二十字以内で書きなさい。（句読点は含みません）。(6点)

問㉔ 傍線部④「復活したみたいだね」とあるが、このときの美咲の心情として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 拓海が自分の絵の欠点を受け入れ、自分と同じような抽象画を描き始めようとしていることに満足している心情。

イ 拓海が自分のアドバイスを理解し、他人の評価を気にせず自分自身の表現をする意欲を取り戻したことを喜ぶ心情。

ウ 拓海が自分の絵の良さに気づき、コンクールで賞を取る自信を完全に取り戻したことを頼もしく思っている心情。

エ 拓海が失敗を恐れる気持ちを克服し、美咲をライバルとして強く意識し始めたことを歓迎している心情。

問㉕ この文章の表現や内容の特徴について説明したものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 拓海の絵に対する悩みや葛藤を、美咲との対話や窓の外の夕景といった情景描写と重ね合わせることで、拓海の心の変化を鮮やかに描き出している。

イ 美咲の強気な発言と拓海の控えめな性格の対比をユーモラスに描くことで、二人の間にある競争意識と友情の深さを強調している。

ウ 夕暮れ時の美術室という閉ざされた空間の変化を克明に描写することで、時間の経過に伴う拓海の焦りとあきらめの感情を表現している。

エ 美術部の活動内容を専門的な用語を交えて詳しく説明することで、中学最後の夏にかける部員たちの並々ならぬ情熱を伝えている。

2 次の各問いに答えなさい。(26点)

問1 次の一部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(各2点)(10点)

- (1) 卒業に必要な単位を履修する。
- (2) 彼の意見には矛盾がある。
- (3) 新しい制度に移行する。
- (4) 問題を速やかに解決する。
- (5) 数々の困難を克服する。

問2 次の一部のかたかなを漢字で書きなさい。(各2点)(10点)

- (1) 部屋のカンキを行う。
- (2) 現在の状況をイジする。
- (3) 事件のハイケイを調べる。
- (4) 新しい計画をジッシする。
- (5) フダンの努力が大切だ。

問3 次の文の()に入れるのに最も適当な四字熟語を、後のア～エの中から一つ選びなさい。「ずっと連絡のなかった友人から突然手紙が届いた。まさに()の出来事だった。」(2点)

- ア 青天の霹靂
- イ 五里霧中
- ウ 朝三暮四
- エ 画竜点睛

問1 次の――部の「ない」と、文法的な意味・働きが同じものを、後のア～エの中から一つ選びなさい。「急いでも、もう間に合わ――(ない)。(2点)

ア その意見には賛成でき――(ない)。

イ 冷蔵庫には何も――(ない)。

ウ まだ誰も来たことが――(ない)。

エ その計画は現実的では――(ない)。

問2 先生に対して、自分の行動を伝える敬語として最も適切なものを、後のア～エの中から一つ選びなさい。「先生、昨日いただいた本を、私はもう――()」。(2点)

ア お読みにになりました

イ ご覧になりました

ウ 拝読しました

エ 読まれました

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

私たちは今、極めて「効率的」な社会に生きている。限られた時間の中でいかに多くの成果を上げるかという「タイムパフォーマンス」の追求は、私たちの日常のあらゆる場面に浸透している。この効率化の波は、当然のことながら、人と人とのコミュニケーションのあり方にも大きな影響を与えている。いかに早く、いかに正確に、無駄なく情報を伝えるか。スマートフォンの画面を指先で滑らせ、短文や絵文字だけで用件を済ませる日常は、まさにその象徴と言えるだろう。

しかし、ここで一度立ち止まって考えてみたい。言葉によるコミュニケーションの本質は、果たして「情報の正確で高速な伝達」だけなのだろうか。そもそも、言葉というものは、私たちが頭の中で考えていることや、心の中で感じていることをそのまま丸ごと取り出して相手に見せるツールではない。私たちは、自分の中にある複雑で曖昧な感情や思考を、既存の「言葉」という型に当てはめることで、どうにか他者に伝えようとしている。例えば、「悲しい」という一言をとつても、その背景にある悔しき、寂しき、あるいは怒りといった複雑な感情の※グラデーションは、人によって、またその時々状況によって全く異なるはずだ。それにもかかわらず、私たちはそれを「悲しい」という共通の言葉で代表させてしまう。

「A」、言葉には、どれほど言葉を尽くしても表現しきれない「すき間」が最初から存在している。これこそが、傍線①言葉が持つている性質なのだ。私たちは、言葉を交わすとき、常にこの「すき間」を抱えながらコミュニケーションを行っている。

では、この「すき間」は、コミュニケーションを※阻害するだけの「欠陥」なのだろうか。私はそうは思わない。むしろ、この「すき間」があるからこそ、私たちは他者と真に深くつながることができるのではないだろうか。

想像してみしてほしい。もし、私たちの言葉が、機械のプログラムのように一寸の狂いもなく互いの意志を伝達できる完璧なものだったとしたら、そこに「相手の気持ちを推し量る」という営みは必要なくなる。しかし、現実の言葉には「すき間」がある。だからこそ私たちは、相手が発した言葉の背後にある、言葉にされなかった沈黙の意味を考えたり、少し曇った表情から言葉の裏にある真意を想像したりする。この「相手を理解しようと努めるプロセス」こそが、いわゆる「対話」と呼ばれるものに他ならない。

対話とは、単に情報をキャッチボールすることではなく、言葉の「すき間」を互いの想像力と思いやりで満たした応答によって埋め合っていく共同作業なのである。

ところが、現代社会において、この「すき間」を埋める作業は、しばしば「非効率なもの」「無駄なもの」として退けられがちである。私たちは、誤解や行き違いを極度に恐れ、あらかじめ定義された記号のような言葉だけで会話を済ませようとする。しかし、傍線②効率的なコミュニケーションばかりを追い求めることには、大きな危うさが潜んでいる。

なぜなら、対話という「回り道」を排除し、情報伝達の効率性ばかりを追求していくと、私たちは他者の多様なあり方をそのまま受け入れる力を失ってしまうからだ。言葉に表れない感情や、簡単には白黒つけられない複雑な問題を、私たちは「面倒なもの」として切り捨ててしまうようになる。その結果、私たちの人間関係は、表面的な情報のやり取りだけで完結する、薄っぺらで壊れやすいものになってしまう。

だからこそ、私たちは言葉の「すき間」を、単なる不足ではなく、豊かな傍線③「言葉の余白」として捉え直す必要がある。余白があるからこそ、私たちはそこに、相手を思いやる気持ちや、自分の想像力を描き込むことができる。言葉が不完全であるからこそ、私たちは謙虚になり、相手の言葉に耳を傾けようとするのだ。

そう考えると、現代の私たちに必要なのは、いかに効率よく言葉を操るかという技術ではない。むしろ、傍線④私たちは「言葉に頼りすぎないコミュニケーション」を学ぶ必要があると言えるだろう。言葉という便利な道具を使いこなしつつも、言葉だけでは伝わらないものがあることを常に自覚し、言葉の向こう側にある相手の「存在」そのものに向き合う姿勢を育むこと。それこそが、情報過多の時代を生きる私たちに求められている。

効率性を追い求める社会の中で、言葉の「すぎ間」に佇み、相手とじっくり向き合う時間を持つこと。それは一見、無駄な回り道に見えるかもしれない。しかし、その⑤回り道の中にこそ、人と人とが本当に理解し合い、つながることの喜びが隠されているのではないだろうか。不完全な言葉を携え、それでもなお他者と響き合おうとする対話の営みを、私たちは今一度、大切に守り育てていかなければならない。

書き下ろし

(注)

※グラデーション……色や調子などが、段階的に少しずつ変化していくこと。

※阻害……さまたげること。じゃまをすること。

問1 本文の空欄「A」に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。(5点)

ア つまり

イ しかし

ウ なぜなら

エ さらに

問2 傍線部②「効率的なコミュニケーションばかりを追い求めることには、大きな危うさが潜んでいる」とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由を、「くから。」という結びにつながるように、四十字以上五十字以内で書きなさい(句読点も一字に数えます)。(1点)

問3 傍線部③「言葉の余白」とあるが、筆者はこれをどのようなものとして捉え直す必要があると述べているか。本文中から、ふさわしい言葉を十字で抜き出し、初めの五字を書きなさい(句読点も一字に数えます)。(5点)

問4 傍線部④「私たちは『言葉に頼りすぎないコミュニケーション』を学ぶ必要がある」とあるが、これは具体的にどのようなことか。五十字以上六十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。(6点)

問⑤ 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。(5点)

ア 現代の効率的なコミュニケーションは、言葉のすき間を完全に排除することで、相手への誤解や行き違いをすべて解消している。
イ 言葉は、個人の複雑な感情を正確に切り取るための完璧な道具であり、私たちは対話を通じてその精度をさらに高めるべきである。
ウ 言葉のすき間はコミュニケーションの欠陥ではなく、相手の表情や沈黙を想像し、互いに理解を深めるための大切な余白である。
エ 効率的な社会で他者とつながるためには、言葉以外の手段を一切排除し、短文や絵文字を巧みに操る技術を磨くことが不可欠である。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(18点)

高名の木登りといひしをのこ、人を※掟てて、高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えしほどは言ふこともなくて、降るときに、※軒長ばかりになりて、「あやまちすな。心して降りよ。」と①言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び降るるとも降りなん。いかにかく言ふぞ。」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。②あやまちは、安き所になりて、必ず仕ることに候ふ。」と言ふ。

(『徒然草』による。)

(注)

※掟てて……指図して。命じて。

※軒長……軒の高さ。

※下臈……身分の低い者。

※鞠……蹴鞠(けまり)。数人で鞠をけり上げ、地面に落とさないようにする遊び。

問「――部「いひし」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(4点)

問㉒ 傍線部①「言葉をかけ」たのは誰か。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 木登りの名人

イ 木に登って梢を切った人

ウ 筆者(兼好法師)

エ 聖人

問㉓ 傍線部②「あやまちは、安き所になりて、必ず仕ること」とあるが、名人がこのように言うのはなぜか。口語訳を参考にして、「油断」という言葉を使って書きなさい。(6点)

問㉔ この文章で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 何事も、その道の名人の教えには必ず従うべきだということ。

イ 物事は、危険な場面よりも、気がゆるみやすい終わりの場面でこそ油断してはいけないということ。

ウ 身分の低い者の言うことは、あてにならないということ。

エ 高い木に登るような危険なことは、初めからしない方がよいということ。